
夏休みラジオ体操大会

甘いぞ甘えび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏休みラジオ体操大会

【Nコード】

N7481E

【作者名】

甘いぞ甘えび

【あらすじ】

「お前の素行の悪さは目を潰れる範囲のものじゃない。だから、夏休みに課題を出す。それをクリアしなかったら、テストでどんないい点数をとっても、卒業はさせない」そう言って中センが出した課題が、まさか”夏休みラジオ体操大会”に毎日欠かさず出席することだったなんて、誰が想像できるっていうんだ？（※BL）

スタンプ一個目（前書き）

JUNE／BL／MLと呼ばれるジャンルの小説です。
同性愛が苦手な方はご遠慮下さい。

スタンプ一個目

毎朝学校に行くために園原 そのはらゆうし 由布司が利用しているバス停の背後に位置する町内会掲示板に六月末から掲示されていた”夏休みラジオ体操大会”。たかがラジオ体操を公園で毎朝やるだけなのに、”大会”はないだろうと、園原は親友である廣田 ひろた 公平 こうへい に笑いながら話していたのも記憶に新しい。

そう、それはまさか自分がそれに参加を義務付けられるとは思ってもみなかった頃の話だ。

高校三年である園原は、天才問題児として校内でも名高く、卒業期である三年になってからも素行は悪いが成績はいいというなんとも矛盾した評価をもらっていた。しかし、さすがに卒業がかかってくるとなって教員陣も必死になってきたらしく、少しでもその素行の悪さをカバーできるような課題を出そうと特別会議すら設けられた。

その会議でひねり出された課題は、「園原の家の近所の”夏休みラジオ体操大会”への無欠席参加」なかやま かずひこ。その判定を下すのは、同じ町内に住んでいる美術教師、中山 なかやま 和彦 かずひこ。中山は毎朝ラジオ体操に参加し、園原の”ラジオ体操カード”に判子を押す役目だ。

そんなくだらない課題を、と思う者も少なくはないだろうが、園原が一回でもこの”大会”を欠席すると、即座に卒業見込み取り消しという条件がつき、園原はいやいやながらも”大会”への参加を承諾した。

「おいー、なんでオレまでこんな来なきゃいけないんだよー」

「家近えんだからいいじゃねえかよ」

夏休みに入ってから、”ラジオ体操大会”第一日目。園原は六時十分きっかりに、嫌がる廣田を連れて、会場となっている小さな公園へとやって来た。

すでにラジオはついていて、各地の天気予報やトラフィック情報をお堅い声の女性が読み上げているのを、近所の老人や小学生らが話半分に聞いていた。その顔ぶれは、想像が容易なほどに小学生ばかり。ちらほらとそれを見守る親がいるものの、園原や廣田のような世代はいない。

「あつ。沼岸のジイさんいるじゃん」

「はあ？ オマエあのジイさん好きなの？」

「好きって言うか、面白いじゃん。あのジイさん何でも知ってるんだぜ？」

廣田が指差すところにいるのは、同世代の人間がうらやむほど豊かな白髪を持つ沼岸 めまざしせいとう 正当という男だ。彼は早期退職なのか、働かなくても食っていきける仕事をしているのか、五十代で隠居生活をしているらしく、こうして町内のイベントごとには必ず顔を出す。

沼岸は何故だか情報通で、聞けば何でも答えてくれるというが、彼の話はいつも横道にそれた挙句に分かりにくく、彼と進んで話をしようとする者はあまりいない。そういう意味では廣田は珍しい存在だ。

「お前大人しくラジオ体操してろよ。ほら、あそこに中センいるし。俺沼岸のジイさんのとこ行ってるわ」

そういい残し、廣田はさっさと白髪の沼岸のほうへ去っていく。園原はそれを追いかけようか逡巡したものの、大人しく中山のほうへと足を向けた。

「おう、ちゃんと来たな、園原」

「そりゃあ、あんな脅しつけられちゃあね。で、何すればいいわけ？ 中セン」

中山はその辺りにたむろしている小学生が持っているようなキャラクターの描かれているカードを一枚園原へと差し出す。園原は疑うような目つきでそれを見下し、何かと問うように中山を見やる。

「お前の分のスタンプカードだよ。これのハンコが全部埋まらないと課題クリアにならないからな。失くすなよ」

そのスタンプカードは、すごろくのようにキャラクターと一緒に冒険するような形でハンコを押す欄があり、最終的な八月三十一日の欄には”ゴール”と書かれている。どう考えても高校生である園原が持っているような代物ではない。

早くもなかったやる気がしょげていく感じがして、園原はわざとらしくため息をつく。

「中セン、楽しい？」

「ある意味では楽しいな。ちなみにそのカードに勝手にハンコ押しまくったところで無駄だからな。毎朝ちゃんとおれに会うこと。それが課題の一環だ」

美術教師である中山は、以前にペーパーテストで園原に”回答する価値もない”とテストを突っ返された経験があり、それ以来どことなく園原に目を付けている。しかし、若い教師とあってか、園原に理解を示し、今回の課題も彼が提案したものに多少の加筆修正が加わったものが採用されている。

「両親の”七光り”で卒業したければそうすればいいんだよ、お前は。自分の力で卒業したいんだったら、ちゃんと毎日出てくるんだな」

「ちっ。言ってる」

園原の実家は昔からの地主で、今では不労所得だけで家族全員が食っていけるだけの収入がある。それにも係わらず、園原の父親は働くことを選び、事業を立ち上げた。その事業も驚くほど軌道に乗り、あつという間に大企業となった。

つまり、園原は黙っていても金が手元にあるという大金持ちの一人息子なのだ。

素行が悪くても退学や休学にならない理由は、そこに寄与するところが多い。だが、園原自身は金の力に頼ることを嫌い、素行が悪くとも成績はトップクラスを維持していた。

「おいっ、園原。来るだけじゃないぞ。ちゃんとラジオ体操していけよ」

中山の元を離れた園原は、廣田を目で探し、彼が沼岸と話しこんでいる様子に眉を寄せる。園原の親友である廣田は、時々よく分からない行動に出ることがあるが、園原が一番理解できないのは、あの沼岸に廣田が懐いているということだ。

沼岸のどこがいいのかさっぱり分からない園原は、廣田を諦め、公園全体を見渡せる位置を確保する。

「ん？」

園原は自分からさほど離れていない位置に、三十代ぐらいの男が立っているのを発見し、じっと彼を見やる。学生的には夏休みとは言え、世間的には平日の朝という時間帯に、三十代ぐらいの男がここにいるというのはどこか不自然だ。小学生の親とは思えないし、一体何なのかと疑問を走らせていると、ラジオ体操が始まる合図が耳へと届く。

『ラジオ体操第一から!』

ざらざらしたラジオから聞こえる音声は、原稿をそのまま読み上げていくようなペースでピアノの伴奏と一緒に体操の動きを指示し始める。

園原は辺りの様子を伺い、中山がやれと言わんばかりにこちらを見ていることに気付き、しぶしぶ身体を動かし始める。言われるままに身体を動かしているのはさほど苦ではなく、むしろ退屈な園原は、近くにいる男の様子をうかがうことに決めた。

特に終了の合図があったわけではなく、ラジオ体操が終わるとラジオが消され、公園に集まっていた人々は思い思いに解散し始める。名も知らない男を観察していた園原は、その男がきよろきよろと辺りの様子を伺い始めたのをきっかけに、そちらへと近づいていく。

「おはようございます」

「あ……、おはようございます」

その男はTシャツにジャージという組み合わせだったが、全体的にさわやか系で違和感はない。しかし、ぴよこんとはねている寝癖

が彼のいい男ぶりを半減させていると言っても過言ではない。

「俺は由布司って言うんだけど、あなたは？　この辺の人？」

対する園原は、今一番お気に入りブランドのポロシャツにちよつとしたデザインの入ったパンツを組み合わせた格好で、ラジオ体操に来るような格好ではないことは確かだ。

「最近この辺の人になった人です。僕は若菜^{わかな} 雅^{ただし}と申します」

「あれ？　最近？　どこに引っ越してきた人？」

園原のぶしつけな質問に対しても、若菜は一切嫌な顔せず、公園から見える一軒家を指差す。その家は今時にしては珍しいほど旧式の洋館で、昔から住んでいる一家がいたはずだ。売りに出したという話も聞かないだけに、園原の疑問はつのる。

「友人の家なのですが、友人が数年家を空けるというので、代理に住むことになったんです」

「ああ、なるほど。若菜さんお一人で？」

例の洋館はこの辺りに住む小学生には”ホーンデッドマンション”と呼ばれているが、それが否定できない程度には古く、恐ろしげに見える。それだけでなくとも大きいその家に一人で住むというのは不自然な大きさの家だ。園原の質問は失礼ながらも的を得ている。

「そうですよ。生憎と結婚はまだで」

「ってことはお相手はいらっしゃるんですか？」

「残念なことに募集中です」

同世代の人間は園原の望むペースでの会話ができず、苛々することが多い。だが、若菜と話しているペースは園原にとって気持ちの良いもので、園原の顔には自然と笑みが浮かんでいた。

「若菜さん、お仕事は？」

「会社員をしています。ああ、フレックス制を利用しているので、朝には余裕があるんですよ」

園原は公園の出口付近で中山がこちらの様子をうかがっているのが見え、ちらりと若菜の住んでいるという洋館のほうへ目を向ける。

「俺このあたり住んで長いんですけど、あの家、小学生の頃は”お

化け屋敷”とか呼ばれてて、誰も近づかないんですよ」

「ええっ？ そうなんですか？ 僕は結構好きなんですけど」

歳の割には落ち着いている園原には、若菜の驚く所業があまりにも幼く見え、思わずくすりと笑みをこぼす。

「そうなんですよね。俺も好きなんです。良かったら、中見せていただませんか？ 俺あの中入ったことなくて」

突然の申し出に、若菜は驚いたように両目を見開いた。しかし、一切嫌な顔をせず、にこりと笑ってみせる。流石に警戒されるかと踏んでいただけに、逆に園原が驚いたが、その同様は一切表には出さない。

「いいですよ。ただ、まだ越してきたばかりなので片づけが済んでいないのですが、よろしいですか？」

「ええ、構いません。こんな朝早くからすみません」

沼岸の横にいる廣田がこちらを見て眉を上げたのが分かったが、園原はにっこりと笑みを浮かべた顔で手を出すなとけん制し、案内に先頭に立った若菜の後をついていった。

スタンプ二個目

若菜が住んでいるという洋館の中は薄暗く、夏だというのにひんやりとした空気に満ちていた。きつとこんな雰囲気だから小学生に”ホーデッドマンション”などと呼ばれたりするのだろうか、大人の目線から見ると、趣のある魅力的な館だ。

「勝手に見ていてくれて構わないよ。僕はちよつと支度をしてくるから」

「あ、はい。ありがとうございます」

自分に対して敬語で喋る若菜に違和感を感じた園原は、自分が高校生であり、敬語を使う必要はないと説き伏せた。若菜は笑って「高校生に見えない」と園原を評したが、実際園原を知らない人間からすると彼を高校生だと見抜くものは少ない。

「若菜さんね……」

ポケットに入れっぱなしだったケイタイ電話が着信を知らせ、パカリと画面を開くと、電話ではなくメールが一通届いているとの表示がある。差出人は見なくても分かった。

メールボックスから届いたばかりの未読メールを開くと、想像通りに差出人は廣田。内容も想像通りに、「何を考えてる？」とだけだ。園原はニヤニヤと返信を打ち、送信が完了したのも確認せずにケイタイをポケットの中へと落とし込んだ。

頭が良かったのと家が富豪であったことから、何をやっても許される立場にいる園原は、いつも何か思いつくとその場その場で行動に移す。その所為で彼が何を考えているのか周囲の人間には一切理解できず、彼が考えを行動に移した後でその意図を知るのだ。

彼が素行が悪いと言われる原因もそこにあり、同時に頭がいいと言われる原因もそこにあった。

「由布司くん。朝ごはんは食べた？」

普段自分のスペースとして利用しているのだろう部屋からひよい

と顔をのぞかせた若菜は、楽しそうに部屋の中を眺めている園原に気軽に声をかける。彼の家と彼の性格を知っている者ならばそう気軽に声をかけられるようなものではなかったが、生憎と若菜と園原が出会ったのはつい五分前ほどだ。

「いえ。でもお構いなく。若菜さんも忙しいでしょうし」

「いや、ぜんぜん平気なんだけど、由布司くんが食べないって言うならそれでいいし。無理は言わないし。そうそう。由布司くんも僕に敬語使わなくていいよ」

園原が振り向くと、若菜はすでにスーツ姿に着替えていた。しかし、まだ頭の寝癖だけはついたままだ。もしかしたら本人も気付いていないのかもしれない。園原は、本人が気付くまでは言わずにこうと、なるべくそれを見ないように心がける。

「そんな。若菜さん年上じゃないですか。タメ語なんて」

「そう言われると傷つくなあ。僕そんな年上に見える？」

「えっ？ おいくつなんですか？」

ハッキリ言って、園原は学校外で外面だけはいい。ニコニコと人のいい笑みを浮かべ、謙虚そうにしていれば相手は油断して思わぬところでボロを出したりするものだからだ。園原は事実まだ子供であることを武器とし、上手く大人の社会を渡っていた。

「うーん、君らにとって見ればオジさんかなあ。三十一だよ」

「三十一？ もっとお若いかと思ってました」

「あはは。お世辞はいいから」

「お世辞なんかじゃありませんよ。若く見えますって、若菜さんは癖なのか、若菜はスーツのジャケットの襟を正し、そこについているバッヂをさりげなく指で確認する。園原はちらりとそれを確認し、その話題に触れるべきか悩む。ジャケットの襟元で金色に光り輝くそれは、ひまわりに天秤。まさしく弁護士バッヂだ。

「オジさんをからかわないでくれよ、若者」

「はは。三十でオジさんとか言っていると、他の方に失礼に当たりますよ、若菜さん」

園原はふと今気付いたとばかりにきよろきよと辺りを見回す。
その動きに若菜が首をかしげる。

「あ、いえ。時計がないから、今何時なのかなって」

「ああ、僕はあと十分くらいで出るけど、由布司くん予定あった？」
時間が限られた中ではすべての情報を探るのは不可能だ。園原の頭の中では、時間をかけてゆっくりとやっていく長期計画が練られていた。しかしそんなことを露も知らない若菜は、狼に騙されているとも知らぬ赤頭巾ちゃんのようにきよんととして園原を見ている。
「折角若菜さんに知り合えたのに、時間がないですね。まだ聞きたいこととかあったのに」

「はは。じゃあ明日の朝もくればいいよ。どうせラジオ体操には行くからね」

ただ教師に命令されたからといって大人しくラジオ体操に出席していたのでは面白くないと思っていた園原は、いいところにラジオ体操へ赴く口実ができたのにやりと口を笑わせた。

「ありがとうございます。じゃあ、また明日お伺いしますね。今日はお邪魔しました」

「いえいえ。こちらこそ、引っ越してきたばかりだから一人でさびしかったんだ。話しかけてくれて嬉しいよ」

それこそ園原の計画通りの返答だ。園原はにっこりと人を疑わせない笑顔を浮かべて頭を下げた。

「じゃあ、いつてらっしゃい、若菜さん」

園原由布司の友人と聞かれれば、まず一番に名前を挙げられるのが、廣田公平だ。廣田は身内に外国人がいるだけあり、英語は堪能だが、そのほかの教科は並みの上といったところ。その分容姿には恵まれ、週交わりに彼女が違ふというような状況のときすらあったくらいだ。

「廣田は自分では問題のない”普通の生徒”という立場でいたつもりであったが、園原の友人であるというだけで教師陣からは目をつ

けられ、拳句には策士な園原に振り回されるハメになっていた。

「オマエさあ、いい加減オレを巻き込むのやめてくんない？ 成績に響くのよ、オマエといると」

「ふうん、そうなんだ。大変だね」

廣田は基本的に頭の回転のいい人間が好きで、園原はその部類に入るほうなので仲良くしていた。しかし、園原の暴挙は、流石の廣田でも目を見張るものがあった。

まず園原の暴挙で有名なものといえば、学校で定期的に行われる定期テスト。普段授業への出席率は恐らく三十パーセントにも満たないだろう園原は、定期テストを休んだことはない。ただし、回答を済ませると許可もなく帰って行く。それでいてテストの点数は満点に近いというのだから教師泣かせもいいところだ。

しかし、園原は普通に回答するだけでは終わらない。問題に間違いがあれば細かくそれを指摘するわ、質問の意味が少しでもおかしいと回答しないわとで、ハッキリ言って迷惑千万。不人気な教師のテストの間違いを指摘したときなどは密かに生徒からエールがあったものの、園原のこの行いを推奨している生徒も少ない。

「で、なんなの、今回は」

園原は学校に行っていないだけあって、様々なところに顔が利く。洋服や身の回りのアクセサリを同一ブランドで揃えているのも、アパレル関係にコネがあるからだ。

しかし、ここが園原のポリシで、彼は家から一銭も金をもらってはいない。服を買うのも、遊びに行くのも、すべて自分で稼いだ金を使用しているのだ。それも、寝る時間を惜しんで使ったバイトで。だが、その涙ぐましい努力を知っているものはほとんどいない。彼が富豪の一人息子とだと知る者は全員口をそろえて親の金だと決め付ける。

「俺あの人気に入った」

「へえ、そう。良かったね」

家も成績も平々凡々である廣田は園原の環境がうらやましいと思

ったことがないと言えは嘘になるが、彼の立ち位置に自分が立ちたいかと言われれば即座に否定できる。一般人として育った自分には恐れ多い立場だ。

「何だよ、つれないな。沼岸とイチヤついてたくせに」

「イチヤつくとか言うなよ。オレはあのジィさんをソンケイしてるの」

廣田の目からすると、園原はハッキリ言っておかしい。彼のセンスはまあいい。しかし、彼の好きな人間のタイプとなると決して理解はできない。その逆もまた同じなのだが、互いに同タイプが気に入る者同士が一緒にいるのも後々面倒を引き起こしかねないのだからよい結果なのだとも言える。

「へーへー。まあ俺の見えないところで乳繰り合ってくださいー」

「オマエなあ……」

園原は廣田というときはこうしてお茶らけていることが多いが、一步外へ出た途端、きりりとして隙のない男に切り替わる。こんなきっちりとした切り分けられるというのはある種役者のようで、隣で見ている廣田は時に感動してしまったりする。その使い分けをしているとき、園原は若くも年老いても見えるのだ。

「でさ。お前と沼岸取り持ってやるから、こっちも手伝え」

「はあっ？」

そして廣田が園原と付き合っている上で一番の謎がこれだ。突拍子もないことを突然言い放つ。そして、誰かが止めないと、いや、誰かが止めてもそれを実行する。園原が様々なところでコネを作っでこれるのも、この有言実行力があってこそその賜物だろう。

「な。お前沼岸好きなんだろ？　ならいいじゃん」

「ちょ、ちょっと待て！　誰が、誰を好きなんだって？」

常々廣田が思うのは、園原には常識が通用しないということだ。園原はその頭脳がものを言うように、一般的な常識は当てはまらない。自分がやるといえば、普通はやらないことをやる。服だって、女物だって平気で着る。男だって、平気で好きになる。しかもそれ

をやましいとか後ろめたいとか思うことがない。園原にとってはそれが”普通”なのだ。

「廣田幸平が、あの沼岸……なんていうの？」

「沼岸正当！　　っても、オレは別にそういう意味で彼を好きってわけじゃ……」

園原には、常識は通用しない。

「好きなんだろ。ならいいじゃん」

そして、遠慮がない。

「それに、相手はもう五十過ぎだぜ。急がないと枯れんぜ？」

廣田は何度となく自分に「何故園原といるのか」と問いかけてきた。そのたびに園原によってその回答を邪魔され、横槍を入れられ、混乱させられて今までやってきた。

もし廣田が園原と出会う前の自分に一言言えるとしたら、こう言っていただろう。”園原由布司には近づくな”。

スタンプ三個目

六時十分に公園へ行く。若菜に挨拶をしてから中山の元へハンコをもらいに行く。若菜を見ながらラジオ体操。そして、若菜の家へ行く。

始めはなんだかんだと言っていた廣田もとうとう諦めたのか、毎朝園原に起こされるがままにラジオ体操へと参加していた。園原が若菜の元へ行く代わりに、廣田は沼岸のところへ行き、園原に言わせると”下らない”会話を花を咲かせている。

若菜はなんの疑いも持たず園原を受け入れており、園原の裏表ぶりを知っている廣田はつつい老妻心から若菜に対して忠告したくなってくる。しかしそのたびに何かに感付いた顔の園原に睨まれ、口を閉ざした。

「高校生なのに毎朝ラジオ体操に来るなんて偉いよね、由布司くんって」

「そんなことはないですよ。それより、何で若菜さんが来てる方が気になりますよ」

若菜は若いながらも司法試験に受かっているちゃんとした弁護士だ。園原が聞き出したところによると、数人の弁護士が籍を置く弁護士事務所に勤めているという。その事務所は、法廷へ立つことがない日は朝十時までに出勤すればいいというフレックス制なので、朝は比較的時間に余裕があるのだとか。

「僕は引越して来た時にあの人が挨拶に来てくれてね。その時に子供がいるなら是非って言われたんだよ」

そう言って若菜が指差したのは、廣田と長話に盛り上がっている沼岸だ。園原は頭の中に沼岸の働きに報いてやろうとメモし、頷いて続きを促す。

「でも僕は独り身だからね。だけどそれじゃせっかく挨拶しに来てくれたのに失礼な気がしたから、僕が来てるってわけだ」

若菜の律儀さというか、お人好し加減には流石の園原もつい苦笑してしまった。たかだか引越し挨拶の文句に対し、それを断ると悪いと思うなど、園原には考えられない。園原だったらバツサリと切って捨てていたことだろう。しかしそれをしないのが若菜の長所であり、園原に気に入られる原因とも言えた。

「朝は時間があるし、何よりこんな近くの公園でラジオ体操なんてやられたら、嫌でも目が覚めちゃうから」

ふざけたように笑う若菜も、完璧な善人というわけではなかったらしい。しかし若菜らしい理由に、園原はくすくすと笑う。

「若菜さんって面白いですね」

「えー？ そんなつもりないんだけどなあ」

若菜と園原が、一回り以上も年齢が離れているとは思えない。園原は知れば知るほどますます若菜を気に入っていく自分に気付いたが、それをセーブするような理由は何一つ見当たらない。

廣田に言わせると、「園原が気に入ったものが手に入らなかったことはない」。というのも、園原は相手に合わせて自分を変えることができる技量がある。それだけに、相手が男であろうが女であろうが、彼を嫌うことはない。

ただし、それも彼が飽きてしまうとそれまでだ。流石に若いだけあり、園原は飽きやすい。しかも、園原は飽きてしまった途端に態度が豹変するという最低なヤツだ。それまではずっと相手に合わせて泣き笑い怒っていた園原が、突如として何の前触れもなく、ぱったりと相手に合わせるのをやめる。その現場を見て知っている廣田は、その時に相手を感じるものは、”恐怖”以外の何ものでもないと言いたくらしいだ。

「いいなあ。俺の周りにも若菜さんみたいな人がいたらもっと楽しかったのに」

「いいじゃん、今からでも遅くないよ。こうして知り合えたんだからさ」

廣田は園原を”努力する我侭大王”と評した。それも言いえて妙

だ。園原は親に頼らず自分ひとりで何でもやろうとするので、そのための努力を惜しまない。それも生半可な苦勞ではないことですら、平気で実行する。ただし、それもこれも自分の我俥なのだ。親に頼りたくないと思うことも、なんでもして見たいと思うことも、すべては園原の我俥だ。しかし残念ながら、”努力する我俥大王”の意味が分かるのは、彼の両側面を知る廣田以外にはいない。

「そう言えば、彼は由布司くんの友達？」

園原からしてみると、廣田は”器量の悪いやつ”という印象が強い。外見は上の上、英語もバイリンガルに喋ることができるというのに、廣田はそこそこでとどまる癖がある。癖というよりは自分からそう仕向けて、そこそこの位置にとどまっているという感じも拭えなくはない。どっちにしろ園原からしてみると、もったいないだけだ。

「廣田？　そうですよ。沼岸さんのこと好きみたいでいつも向こう行っちゃうんですよね」

廣田と園原を並べて比べてみると、どちらかと言えば廣田のほうがモテる外見をしている。人懐っこそうに見える甘い笑顔を浮かべれば、童女でも老婆でも騙せるだろう。それに対して園原は目つきが鋭く、黙って無表情でいると怖い。しかし、彼も意図的に害のなさそうな笑顔を浮かべているときは人受けする。二人がそろっている図はどんな芸能人かと思うほどの画になることだろう。

「沼岸さん？　って、あの人？　僕のところに来てくれた人だよ」

「そうです。この辺りじゃ有名な隠居老人なんですよ」

「老人って、彼はまだ結構若いだろうに」

沼岸に関しては大小様々な噂が飛び交っているが、その実を知っている者はいない。あれだけ話をしているのだから恐らく廣田ぐらゐは知っているのかもしれないが、廣田もそのことを大手に公表しないのだから余計噂は広がる一方だ。

「詳しいことは知りませんが、不労所得で生きていけから隠居して

いる、という噂が一番信憑性がありますね」

どうしてこんな高級でもない一般的な住宅地にこれだけの富豪が住んでいるのかという点は、本人たちのあずかり知らぬところのことしやかに囁かれている不思議の一つだ。

園原家はこのあたり一体の地主だからいいとしても、このあたりには沼岸や、彼に似たような性質の者がなぜか多く住んでいる。若菜が住んでいる家の持ち主も謎の金持ちの一人で、大昔に園原家からその土地を買って以来、代替わりしつつもそこへ住み続けている。「へえ。なんだか面白いね」

「そうですね。ところで若菜さんって夜は何時ごろ帰って来ます？」園原が本気で行動を始めると、進めるのは驚くほど早い。そのペースによく相手が疑いもせずについてくるなど感心しそうなものだが、園原が相手にとことん合わせて演技しているとき、相手は那不自然さにすら気付かないのだ。まるで魔法にかかったのごとく、園原を信用する。

この性質を利用すれば、園原は立派な詐欺師にでもなれそうなものだが、生憎と彼は犯罪には興味がない。金は腐るほどある家に育った人間だけに、金を儲けるための犯罪というものに魅力を感じないのだ。

「今日？ 今日には特に何もないはずだから、いつも通りかな。八時すぎだと思う」

「八時すぎ？ だったらそれくらいにお邪魔しても構いませんか？」犯罪を犯すなら、完全犯罪以外はやらないと豪語する園原だが、芸術的な完全犯罪が彼の中で計画されようものなら、本気で実行しかねないのだから恐ろしい。今の状態では、実行すると決めた園原を止める手段はなく、外野は黙って見ているだけとなってしまいうだろう。

「いいけど、どうしてまた？」

園原を止める人物がいずれは現れることになるのだろうが、現状ではそのような人物はまだ存在せず、この悪漢をこの世にのさばら

せているような状況だ。彼の所業のすべてを知る者たち、また、その被害にあった者たちからすると、一刻も早い救世主の登場を待ち望んでいる。

「いえ、今日は夕食が一人なので、ご一緒できたらいいなと思って」そんなことは露も知らない若菜は、園原のもしもじとしたいじらしい演技にニコニコと笑顔を浮かべて頷く。

「なんだ、そんなこと？ 由布司くんさえ良かったら、外で一緒に食べようか」

「え？ でも……」

「オジサンがおごってあげるから。八時に駅前待ち合わせでどうかな？」

親切心から言ってるのだろう若菜の言葉も、その腹の中では計算済み。表面上はいじらしく微笑なんかを浮かべている園原だったが、その腹の内ではガツポーズでもとらんばかりにニタニタ笑っていることだろう。

「はい。じゃあ八時に駅前ですね。遅れないように気をつけます」

「あはは、僕が遅れたらごめんね」

支度のために自宅へと去っていく若菜の背中を見送る園原の背中に悪魔の羽が見えたのは、きっと気のせいではないだろう。

スタンプ三個目（後書き）

ものっそいグダグダで申し訳ない。
次からはストーリーが見えてきたので大丈夫かと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7481e/>

夏休みラジオ体操大会

2010年10月9日13時20分発行